

ドクター・ ストーリーズ

なぜリウマチ医になったのか？
そして、リウマチ医を続ける理由



abbvie



医療法人社団 小室整形外科医院
小室整形外科医院
リハビリリウマチクリニック
院長

小室 元 先生

病と向き合い、人と向き合い、 地域と向き合って癒すこと

日本のリウマチ治療の
先駆者に学んで

——お父様も整形外科医だったそうですね。

小室先生(以下敬称略) はい。父は整形外科の開業医なので、私は長男ですし、それも道かなと思って。自分は内科系よりも外科系かなと思っていたので、整形外科ならば親父も喜ぶだろうと思えました。

——リウマチ医を目指した経緯は？

小室 自分でリウマチを選んだというわけではないのですが、最初に入局した関西医科大学附属病院は、専門的なリウマ

チ治療を積極的に行っていました。

私はひとつの大学ですとやっていてというよりは、いろいろ国内留学をさせていただき、2年目は星ヶ丘厚生年金病院、3年目に移った病院は松山赤十字病院リウマチセンターでした。松山赤十字病院で、当時部長をされていた、日本のリウマチ治療の草分け的存在である先生に出会いました。

リウマチは、患者さん一人ひとりに対してどんな治療をするかが、もっとも重要ですよ。治療には4つの方法があります。そのうちのひとつが保存的治療、薬の治療です。2つ目が手術、3つ目がリハビリ、4つ目がケアです。この

4つが等しくどれも大事だと提唱した先生です。この教えが今でも私の基盤になっています。

——リウマチ医になったばかりの頃の思いについて教えてください。

小室 2007年頃になってからですが、ようやく生物学的製剤の治療が普及して、リウマチの治療が高度化してきました。ますます薬の使い方をしっかりと勉強してやっていかないと、と思いました。



研修医の頃

——印象に残っている患者さんはいらっしゃいますか。

小室 医師になって最初の患者さんは、女性で16歳で発症して、私が最後の主治医となった方です。33歳で、結婚はされておられませんでした。体重は30キロを切っておられましたね。体中の関節が破壊されていました。その当時は関節破壊を抑制できる薬はありませんでした。ある日、自宅で首がガクッとずれてしまった。要するに延髄圧迫で呼吸停止に

なりました。病棟で人工呼吸器をつけて3日目に亡くなりました。少し前の時代、リウマチというのは、それはもう悲惨な病気だったんです。

これで本当にいいのか、
常に自分に問いかけている

——先生が大切にしていることはありますか。

小室 病と向き合い、人と向き合い、地域と向き合って癒すこと、ですね。私は安心感を与えるため、患者さんには自信がありそうに話しますが、実は患者さんの治療については、いつも自分が正しいとは思っていないんです。もっと他にいい方法があるんじゃないか、違うんじゃないかと。自分の治療が絶対に正しいと思うこと自体、間違いだと思っています。

——患者さんにひとことお願いします。

小室 昔は不治の病と言われたけれど、リウマチは、今は治る可能性のある病気です。適切な治療を行えば治る可能性が高くなることは間違いないので、一人で悩まず、ぜひ早く専門医を受診してみてください。

(2019年10月23日インタビュー実施)